

## 第一章

「…夏（なつ）、そなたを近衛兵に任命する。国に、そして黒狐様に一生を捧げよ」

「承知いたしました」

正座をし、深々と頭を下げた女の短く切りそろえられた黒髪が屋敷内に入って来た風で揺れる。

「…顔を上げろ」

「はっ！」

夏がゆっくりと顔を上げ、声の主を見る。

「励め」

「はっ！」

女はまた深々と頭を下げる。ズキリと痛んだ腹に誰にもバレないようにそっと手を当てて。



「最近暇だなあ……。こおら、アリスちゃん。食べ過ぎると晩飯入らなくなるぞ。それ寄せ」

「あーん」

「んっ、うまいなこれ」

ギルドの食堂でお互いに休みを取っている桜羅とアリスがともに食事をとっている。

「うーん、まだよわよわなメロにはこっちのクエストの方がいいと思う

よ？まあ、僕を連れていくならその限りじゃないけど？」

「バカ！意地悪！」

クエストが張り出されている壁の前でぎゃんぎゃんと言ひ合いをしているのはルイスとメロだった。

「おお、良かった良かった。全員揃っておるなあ」

そこへ、桜羅、ルイスとともにS級冒険者の一人である黒い毛が特徴的な九尾の右京がニコニコと笑いながら入って来た。きりっと上がった眉が見える程の短い前髪に、高い鼻に薄い唇。桜羅とルイスより十は年上に見えるが、黒い肌着越しに見える体は桜羅やルイスに劣らない程に鍛えられている。下にはゆるりと風に揺れる裾の広がったズボンを腰で履いていて、その容姿の美しさと色気はギルドにいる者たちを男女問わず魅了する程だった。

「あ、右京さん、こんにちは」

「はい、こんにちは。アリスさんは挨拶がちゃんとできて偉いのお。どっかのオーガとどっかの天使とは大違いだ」

「うるせえなあ、はい、こんにちは」

「こーんにーちはー」

桜羅とルイスが顔を顰めながらも挨拶をすると、右京がわざとらしい程の老人口調で「それでいいんじゃない」と返し、何度も頷く。

「あ、右京さん！しばらくお姿見ませんでした、クエストに行ってたんですか？」

メロが桜羅とアリスの正面の椅子に座った右京に尋ねる。

「うむ。ちょっと準備をしておってなあ」

「準備い？」

桜羅の眉がピクリと上に上げる。

「ほれ、これじゃこれ」

「「うわぁ！すごい！」」

右京が一枚のチラシを机の上に置く。そこには東国の提灯や灯籠、着物などが可愛らしくデザインされたシンボルとともに「狐暁国建国祭」という文字が書かれていた。

「何ですかこれ！お祭りですか、右京さん？」

「おお、そうじゃ。実は僕も狐暁国の出身でなァ。昔の知り合いから、今回はかなり大きな式典になるから遊びに来ないかと誘われたんじゃ。最近、ギルドの方も大きなクエストはなく落ち着いているし、一緒に行かないか？ S級冒険者にも羽休めが必要じゃろ？」

「……うさんくせえぞ、ジジイ」

「…酷いことを言うのお。儂はただ善意で言うておるのに。なるほど、桜羅は欠席と…」

「う、右京さん！私は行きたいです！」

桜羅の隣に座るアリスがビシッと手を上げる。

「あ！バカ、アリスちゃん！」

「ふむ、アリスさんは本当にいい子じゃのお。よし、儂が責任を持って連れていくからな」

「誰が番を一人で連れていくか！俺も行くに決まってるだろ！」

「…ルイスはどうする？」

右京が目を細めてルイスに視線を向ける。

「狐暁国って確か温泉がすぐく有名だよね！うわあ…うわあ…！」

メロが目を輝かせているのを見て、ルイスがため息を吐く。

「…という訳でもちろん僕たちも行くよ」

「よしよし。なら明日出発じゃ。皆、準備しておけよ」

右京がにっこりと笑ってギルドを出て行く。アリスとメロは二人で楽しそうに話しているが、桜羅とルイスはお互いに意味深に目配せをしていた。

——満月が夜空を照らす。

東国風の屋敷の屋根の上で、右京が月に向かって盃を傾けていた。

「ああ…また泣いてるのかあ。ならなんであんなことを言ったんだ。…よしよし、大丈夫だ。…もうすぐ…俺が迎えに行くからな」

いつも古風な口調の右京が砕けた調子で一人、話し続ける。楽しそうにクツクツと喉を鳴らしていた右京が盃の酒を全て飲み干した後、ゆっくりと立ち上がった。

「ああ…楽しみだ…楽しみだなあ♡」

にいつと細められた瞳は怪しく緑色に光っていた。

「右京さあん、私たちも一緒に行きたいですう〜！」

「ねえねえ、いいでしょお？」

「はてさて。困ったのお」

翌日、ギルドの前に集合した4人は、女性たちに囲まれている右京を棒立ちのまま待っていた。桜羅、ルイスとともに、とんでもなく顔立ちが整い、なおかつ人当たりの良い右京は、女性に囲まれて身動きが取れなくなるこ  
とがよくあるのだ。

「…なあルイス。早くあのスケベジジイ連れて来いよ」

「嫌だ、桜羅が行って来てよ」



「嫌だ。お前が行け」

「嫌だつて」

桜羅とルイスが言い合いをしている間にも、女性たちが右京の体に擦り寄っていく。番がいることが分かった桜羅とルイスと違い、独り身の右京にはこれまで以上にたくさんの女性たちが群がり、右京の「唯一」の立場をつかみ取ろうと躍起になっていた。

「あ♡右京さん、袋からなんか出てますよ！きゃあ！なにこれ、すっごく綺麗な布…」

女の一人が右京の腰に付いている布袋からはみ出た翡翠色の衣を触ろうとした時。

「ぎゃんっ！」

突然前頭部を叩かれたように天を仰いだ女性が地面に倒れ込みそうにな

る。しかし、その前に右京の手がその背中を支えた。

「…危ないのお」

「あ…え…？」

「悪いのお。狐暁国の入国には人数制限があってもう人数は増やせないんじゃない。また今度にしてくれ」

「っあ…は、はい」

女がコクリと頷くと、右京もまたにつこりと笑った。

「では行ってくる。留守を頼んだぞ？」

そう言って女たちに手を振ると、ゆったりとした足取りで右京が桜羅たち  
に近付いて来る。

「待たせたのお。それでは行くとするか」

ニコニコ笑顔で最初に馬車に乗り込んだ右京に、桜羅とルイスは顔を引

きつらせていた。

馬車に揺られて数時間。森の中に入ってから代わり映えしなくなった景色に飽きて、アリスとメロはおしゃべりに夢中になっていた。そして話題は必然とこれから向かう狐暁国のことになっていく。

「右京さんの故郷なんですよ？どんな所なんですか？」

「ふむ…、どんな所か。こちらの国々に比べればかなり自然が多いのお。あとはあまり高い建物もないな。東国独特の着物を着ている者が多いぞ」

「へええ！そうなんですネ！」

「あと社も多いのお。国のあちこちに国神を祀る社がある」

「社…？国神…って何ですか？」

メロが首を傾げると、右京がにつこりと笑う。

「狐暁国の神のことじゃ」

「神……え!? 神様がいるんですか?」

「うむ、おるのお」

「すご、すごい! ねえ、ルイス! 聞いた? 神様がいるんだって!」

「…天使もいるんだから神様もいるでしょ? というかなんでそんなに興奮してるの? 天使だって同じくらい珍しいでしょ」

ルイスが拗ねたように唇を尖らせ、メロの頬を引っ張る。右京は馬車の中で楽しそうに会話をする2組の番を、にこやかな笑顔を浮かべて眺めていた。

「さあて、馬車はここまでだ」

「ここって…森の中ですよね?」

馬車が到着したのは深い森の中にある大きな湖だった。アリスとメロが不安そうな顔を見ると、右京はにっこりと笑って腕を組む。

「うむ、そうだ。実は狐暁国はとっつても遠くてのお。馬車で行こうとすればひと月にかかる。なので、ここから転移魔法を使う。大規模な術式になるから人里離れた所でないといかんのじゃ」

「そうなんですか…」

「ほら、アリスちゃんは俺に抱き着いとけ」

「メロも。僕の手を握って」

アリスとメロがそれぞれの番の近くに寄ったのを確認し、右京がすっと目を閉じる。

「それじゃあ始めるぞ」

右京がゆっくりと目を開けた時には、その目尻に朱色が乗り、普段は隠し

がちな黒い耳とふさふさの黒い尻尾が生えていた。そしてそのまま右京が聞き取れない言葉で歌のようなものを紡ぎ始める。すると、湖の真ん中が光り出した。

「よし、じゃあ行くぞ」

「え？ちよ、きやああ！」

アリスをしつかりと抱えた桜羅がその光の中に飛び込み、ルイスもまたメロを横抱きにして光柱の中に消えて行った。

「…それじゃあ俺も行くか」

ふると狐耳を震わせて笑った右京が最後にその光の中に飛び込んだ。



「賓客…ですか？」

「ああ、建国祭に向けて各国の要人が転移魔法を使って入国することになっている。…黒狐神様の治世に不満を抱く者どもが賓客を襲撃してくる可能性もあるので、その転移扉の護衛をお前に任せる」

「はっ！謹んでお受けいたします！」

夏は、近衛兵団長室で、団長である御剣（みつるぎ）から任務の概要を聞いていた。深々と頭を下げる夏を見て満足そうに頷いた御剣は「では今から湖水の間に行ってくれ。そこが今回の転移扉になっている」

「は！承知いたしました」

夏がもう一度頭を下げて部屋を出て行く。それを見送った後、御剣は大きなため息を吐いた。

「はあ…、俺…後で怒られないよなあ」

御剣が天井を見ながら夏のことを思う。キリツと吊り上がった眉と意志の強そうな瞳。短く整えられた黒髪に化粧もしない平凡な顔立ち。隊服に包まれた身長は少し高めだが細身な体。

——そして、最近は見ることがほとんどできなくなってしまった、弾けるような笑顔。

「…夏に嫌われるのだけはごめんなんだよお、俺は！」

——けれど仕方ない。いくら元と言えども、「上司」には逆らえないのだ。

「…まだかな」

湖水の間に一人立っている夏は、手持ち無沙汰ゆえにぼそりと呟く。狐暁国の兵士となり、毎日訓練に明け暮れていた夏がやっと、近衛兵として重要な任務を任されたのだ。



「うん：建国祭に来てくださる偉い方々なんだから絶対に失礼のないようにしないと！か、髪型とか崩れてないよね…？」

部屋の真ん中に人が数十人は入れそうな程の湖がある湖水の間の隅にいた夏は、自分の身だしなみが気になりだしてしまふ。

「ど、どうしよう。髪、跳ねてないかな…。お、お化粧もちょっとはしてくれば良かった…！そうすればこの眉も少しは優しそうに見えるかもしれないのに…」

夏は一人でぶつぶつと呟きながら肩を落とす。

夏は、ほとんど友人がいない。人付き合いを制限されていた時期があるせいなのだが、そのせいで友人の作り方というものがあまり分からないし、化粧やおしゃれに疎いのだ。

それらを夏に教えてくれる人はいた。

けれど、その人はもう傍にはいない。

「…ちよ、ちよっとだけ湖で確認してもいいよね？」

賓客が転移してくる時は湖面が光ると御剣に聞いている。少し水面を眺めてみたが、光る気配は今のところない。この間に髪が跳ねてないか確認してしまおうと、夏は急いで湖に駆け寄った。そして、身を乗り出して水面を覗き込む。

「ああ！やっぱり、横のところが跳ねてる…！えっと、こっち…かな」

「こっちだ、夏」

「あ、ありがとうございま…す…、…………え？」

夏の頭を大きな手が優しく撫でる。

「え…あ…」

「うん、可愛い。髪を切ったんだな。前の髪も良かったけど、短いのも似合

ってる。それに俺とお揃いだ」

「ひっ…あ…！」

——忘れたかった。けれど忘れられるはずもなかった。ずっとずっと求めていた声。けれど、もう求めてはいけない声。

それが自分の耳元で聞こえてくる。

「っ、い、いやあ！」

立派な兵士になろう、強くなろうと死に物狂いで訓練した。汗だくなり、体が動かなくなるほどに疲弊しても立ち上がり続け、体に戦い方を染みこませた……はずだった。

なのに、今、無様に手を振り回すことしかできない。

「いっ…やっあ！」

忘れていたはずの過去が夏の心を蝕む。震えそうになる足を叱咤して何とか立ち上がると、出入口に向かって走り出す。しかし、太い腕がするりと夏の腰に伸び、そのまま引き寄せられてしまった。

「なーっー？ 夫を置いてどこに行くんだ？」

「ひあああ！」

バチバチいっと眼前に火花が散り、夏の体がガクガクと震える。後ろから夏の体を抱きしめている男がクスッと笑って、真っ赤に染まる耳に唇を当てた。

「ああ…ちやあんと覚えてたんだな、夏。…いい子だ」

「ん　う　う　う　う　う　う　う　う　ッ　♡　♡　♡　♡」

ぐるん♡と白目を向いた夏の体からいっきに力が抜ける。その体を易々と持ち上げ横抱きにした男が、目を閉じて気絶する夏の額に優しく口付けた。それと同時に湖面が光り、その中からそれぞれの番を抱えた桜羅とルイスがふわりと降り立ってくる。

「おい、先に行くな」

「メロが目を回しちゃったじゃないか」

初めての転移魔法の不可に耐えきれず失神してしまったアリスとメロを抱きかかえた二人が右京に歩み寄り、そしてその腕の中に女性がいるのを見て盛大に顔を顰めた。

「…なんだやっぱりそっちが本命かよ」

桜羅が大きなため息を吐く。

「僕はメロが喜べばそれでいいよ」

ルイスが乱れたメロの前髪を優しく整える。

「はは♡たーだいま、夏♡」

そんな二人の声に返事もせず、右京は夏に頬ずりし続けていた。



——私は…、あなたにはなりません。

——国神の資格を失ったあなたに、興味なんかない！

どれほどにあの人の心を傷付けただろう。自分の言葉が跳ね返って己の胸を焼く。ずっとずっと、苦しみが消えない。

これは罰だ。

一番大事な人を傷付けた罰。

「ん…」

いつの間に自分は寝てしまっていたのだろうか。

夏がゆっくりと目を開ける。

「ああ、おはよう、夏」

「…」

「はは♡おめめが零れ落ちそうになってるぞ？ふふ…久しぶりの夏の綺麗な瞳、もっと旦那様に見せてくれ」

「っくくくくい…やあ」

夏はベッドで一緒に寝転び、自分のことを抱きしめながら顔を覗き込ん

できている美丈夫から、まるで幽霊でも見たかのような反応をして逃げ出した。

「…」

「…待て、右京、絶対に俺は悪くない。俺を見るな」

自分の執務室の椅子に座って事務処理をしている御剣は、机の前に仁王立ちしてこちらをニコニコ笑いながらも、とんでもない威圧感を放ち続けている右京に迷惑そうな視線を向けた。

「悪くない？俺の番を隠してるのか？いつからそんなに偉くなったんだ、御剣？よし、じゃあ俺が久しぶりに稽古を付けてやろう」

「待て待て待て待て！嫌だ、絶対嫌だ！俺をボコボコにする気だな！やめろ！俺はもう近衛兵団長なんだぞ！この国の防衛の要なんだ！そんな俺が



ボコボコにされてたまるか！」

「ふむ…じゃあ、後ろにいる俺のものを返せ」

「…」

御剣が大きなため息を吐いて、後ろを振り返る。

「…と賓客が仰っているが？」

「…嫌だ、嫌です…行きたくないです…！」

「…と言ってるが、賓客殿？」

「ああ？」

「俺に凄むな！」

（な、なんで!?なんで右京様さんがここにいるの!?）

夏は目を白黒させ、御剣の椅子の後ろで足を抱えて座り込んでいた。

（右京様は…3年前に国を出られたはずなのにっ！）

夏は泣きそうになるのを何とか堪え、必死に体を縮こまらせていた。

美しい自然豊かな国である狐暁国は、土地神である黒狐の一族を代々神として祀り上げていた。代替わりの時期はそれぞれの黒狐の力に左右され、短い者では100年以下、長い者では500年以上、神が変わらなかった時もあるという。

そして3年前、狐暁国では200年ぶりの国神の代替わりの時期を迎えていた。その時に最も力の強い黒狐が新しい神となる習わしで、当時それは右京だった。

しかし、国神代わりの儀式も近くなったある日、右京の美しい9つの尻尾が消えた。そして、その力も最早神とは言えない程に弱くなっていた。出来

損ないと言われた右京の弟、愛宕（あたご）にも及ばない程に。

誰が事情も聴いてもその理由を離さなかった右京は、国神とはなれず、愛宕が国神となったのだ。

そしていつの間にか、右京の姿は国から消えてしまった。

「右京、お前、賓客として来てるんだろ？ならまず愛宕様の所に挨拶に行けよ」

「なぜ？俺がここに来たのは番を迎えに来たからだ」

「…その番とやらは俺の後ろで怯えてますけど？」

「な〜っ？」

「ひっ！」

右京のどろりと溶けるように甘ったるい声が自分の名前を口に出し、夏

は目を見開いた。

「夏、夏、夏」

「あっ…ひっ…うっ…あう…い、いやあ！」

名前を呼ばれるごとに体が強く反応を示すようになる。夏は顔を真っ赤にして、恥ずかしい声を出す自分の口を塞いだ。

「夏、夏…。いい加減に出てこい。…ここで恥ずかしい思いしてもいいのか？」

「っう… う… あん… んう…、 んう、 うう！」

夏が両手で自分の口を塞ぎ、ぎゅつと目をつぶる。出て行くのを嫌がるように首を横に振ると、クスクスと笑い声が聞こえてくる。

「そっかあ♡夏は恥ずかしいところ見られるのが好きなのか♡うゝん、まあ御剣ならいいか♡」

「あ、おい、右京…」

「動くな、御剣」

「っう！」

右京に睨みつけられ、御剣は一切体を動かすことができなくなる。その間に右京が御剣の机の後ろに回った。

「みーつけた♡」

そこにはペタンと床に座り込んだ夏が「ふーッ♡ふーッ♡」と荒い息を吐いていた。口を押えた両手の隙間から、ぽたぽたと涎が漏れ、床に染みを作っている。

「夏、夏、なーっ？」

「っあ！い、いやあ、ああ、んうう！」

右京は体を丸めて刺激に耐える夏の顎を掴んで、上を向かせる。そして口

を覆う手を優しく外させた。

絶対に声が漏れないようにと力を込めていたはずなのに、右京に触られるだけで簡単に力が抜けてしまう自分の体の浅ましさに、夏はさらに真っ赤になって身を振る。

「いや、やだ…やだあ…離して、んう…離してえ!」

「夏、ダメだろお? 旦那様が来いって言ったら、来ないと。だから、おーしおき♡」

「あっ…あう…や、やだ…ごめ、ごめんなさい、やだ、あれ、やだああ!」

「夏、いい加減に俺の名前呼べ」

「い、いやあ…呼ばないっ…呼ばないい!」

「…そっかあ♡じゃあ仕方ないな♡」

しゃがみ込んでいた右京が夏と目を合わせた後、指で夏の頬をなぞり、唇

に押し当てる。そしてその中にぷちゅう♡と指を押し込んだ。

「はは♡ぬっとぬとでやらしーなあ、夏のお口は…♡」

「んゝむううゝゝゝゝッッ！」

「こかも…、俺がいーっぱい開発してやったよなあ？…復習しよう…なあ？」  
にゅこにゅこにゅこにゅこにゅこにゅこにゅこにゅこにゅこにゅこ♡

「んゝおおおおゝ♡」

右京の長い指で、舌を扱かれ、夏が目を見開き低い声を上げる。バチバチバチっ！と頭の中で火花が弾け、夏の体が可哀そうなほどに激しく痙攣する。顎を掴まれているせいで右京から視線を逸らすこともできず、夏は情けない喘ぎ声を上げながら右京の手で強制絶頂させられた。

「ほおら♡もつとイケ♡イケイケイケ♡イーケって、オラ♡」

「うあああつあ！いやああ！つあああ、やべ、やべでっ！やべでえええ！い

きゅいきゅいきゅううう~~~~ッ!!」

ジタバタと暴れ出す夏の体を羽交い絞めにして、右京が心底嬉しそうな笑い声を上げる。

「かぁいいなぁ♡可愛い、俺の夏だ♡ただいま、夏♡ずっと俺のこと、待っていてくれたんだよなぁ? 嬉しいなぁ♡これから、毎日夏のこと、イクイク♡ってさせてやるからな?」

「いぁぁっぁ! たしゅけ、たしゅけてえ、いぎゅ、いぎゅうう!」

夏の隊服の股の部分は吹き出した愛液や潮のせいですっかり色が変わってしまっていた。

「はは♡夏、ほら♡」

右京が指先で夏の鎖骨から胸の頂をなぞっていく。そして、最後にぐうつと乳首を押し込んだ。



「あぎっ!？」

低く短く喘いだ夏のまんこから、ぷしゃああ♡と尿が漏れる。

「あははは♡出ちゃったなあ♡ひっさしぶりの夏のおしっこ♡」

「あ…ああ…ひっ…ひえ、うーん、ああん、あーん」

がくがくと震えていた夏はどうとうボロボロと大粒の涙を流し、子供のように泣き出してしまった。そして無意識のうちに、目の前の男に縋り付く。

「うあ、あーん、うえええ、ひいん！」

「うんうん、夏は本当にいい子だな。…ほんとにな」

右京が軽々と夏の体を抱き上げる。

「…愛宕には後で挨拶に行く伝えろ。賓客は4人、祭りが終るまで滞在するから、最大限のもてなしを。…明日まで俺は誰であろうと対応はしない」

右京の瞳が光り、頭の上にある黒い耳がフルッと揺れる。

「…承知しました、我が君」

御剣が床に片膝を付いて、深々と頭を下げる。そのまま右京は御剣に目もくれずに、部屋を出て行ったのだった。

——「美しいな」。

——その言葉だけは耐えられなかった。

——愛していた。愛している。

——でも自分が隣にいと、美しいものがまた傷付いてしまうと思ったのだ。

「っ！」

カッと目を開いた夏は、勢いよく体を起こして周囲を警戒し、腰に付けて

いるはずの護身用の短剣に手を伸ばす。

「あ……れ？」

しかし、そこには何もなかった。

「……ひっ！」

そして隊服を着ていたはずの自分の体は、まるで天女が着ているような軽くて美しい翡翠色の薄衣の浴衣を羽織っていた。その衣は、丸い障子から差し込んでくる月光を吸収し、うっすらと光っている。

「綺麗……」

夏がその衣を指でスルリと撫でた時、遠くから引き戸を開ける音が聞こえてきた。そのゆっくりとした歩幅、しっかりと床を押し込む重みのある足音に夏は恐怖を抱く程に聞き覚えがあった。

「ひっ……！」

夏は布団から這い出て、足音がする方向とは反対に駆け出す。

「逃げないと…逃げないと…っ！」

ぶつぶつと小さく呟きながら、夏は美しい透かしの文様が施された障子扉を開け、次の間へ進む。そして、それを何回も何回も繰り返す。

「逃げなきゃ…逃げないと…！」

【逃げないと犯される…か？】

「ひうう！」

まるで耳元で囁かれるような程に近い距離で低い声が聞こえ、夏は自分の両耳を塞ぎ、蹲る。慌てて周囲を見渡すも、そこには誰もいない。けれど、何回も障子を開けて進んできたはずなのに、こちらに近付いて来る足音が消えないのだ。

ぎっ…ぎっ…ぎっ…ぎっ…。

【なあ、夏？なーつ？どこまで行くんだ？】

「っ、い、いやああ！」

夏はぶんぶんと首を横に振り、大きく悲鳴を上げると耳から入って頭も体も揺さぶってくる甘い毒のような声音を思考から追い出す。

「逃げないと…逃げないとダメなの！」

今にもへたり込みそうになる自分の両足に活を入れ、夏はまた障子を開けてその先へと駆けだす。

【ああ、まだ行くのか？はは♡いいぞ、夏が追いかけてこしたいなら、いくらでも付き合ってやる♡】

ぎい…ぎい…ぎい…ぎい…。

【でもなあ…、いいのかあ？お前の旦那様をそんなに焦らして…？俺を我慢させたらどうなるかは、お前が一番良く分かっているはずだぞ、夏？】

ぎい…ぎい…ぎい…ぎい…。

相手の足音はゆっくりなのに、自分の方が必死に駆けているのに。どうして、足音はどんどんどんどん近付いてきているのだろうか。

「なんで…なんでなんでえ！」

もう何枚目の障子か分からない。それでも夏は開け続ける。

「やだやだ、きちゃやだあ…！」

【嘔吐き♡】

「ひゃうう！」

吐息さえも耳元で感じて、ビクビク♡と体を震わせた夏は次の障子戸に手を掛けたまま、ズルズルと畳に崩れ落ちた。

ぎい…ぎい…ぎい…ぎい…。

ぎい…ぎい…ぎい…ぎい…。

「あ…あ…っ」

夏が体を震わせながら後ろを振り返る。するとそこには室内であるにも関わらず、月光に照らされた大きな耳と尻尾がある大きな男の影が映し出されていた。

「夏、ここを開けなさい」

全ての女を虜にするような低く甘やかすような声。

「い、やあ…!」

夏は俯きながら両手で顔を覆い、シクシクと泣き始めた。

「分かっているはずだ。ここは俺の領域だ。俺が許可しない限り出られない」

「いやあ…出して、ここから出してください…っ!」

【俺の名前を呼んで、この扉を、開けるんだ】

「っううゝゝゝ♡♡」

また耳元で聞こえる吐息混じりの声。夏はだらしなく開いてしまいそうになる口を何とか引き締め、四つん這いで男の影を映し出す障子の前まで進み、そこを震える両手でグツと閉めた。

「ごめんなさい…私が悪い、全部悪いんです…、私があなたに…!」

【あなた？違う、右京だ】

「んやああ♡」

ビリビリ♡と体がしなる程の強い快感が走り、夏はぎゅうっと目を閉じて絶頂するのに耐えた。

「い、いやあ…もう、やなの…これ、いやです…い、やなんです…!」

夏は「はあー♡はあー♡」と四つん這いのまま口を開いて荒い呼吸を繰り返す。もう口から漏れる唾液のことなどに構っていられる余裕はなかった。畳の上にポタポタと落ちていく自分の涎をぼーっと見つめながら、夏は必



死に目の前まで来ている男に懇願する。

「お願いします…なんでも…何でもしますから、だからっ！」

【愛してるよ、夏】

「っ…！」

夏の両腕から力が抜けて、夏の頭が無様に畳に叩きつけられる。

「や… ああ… ツ♡♡」

【ああ、愛してる、俺の花嫁。俺の番。俺の唯一。俺の夏。いや？来るな？ここから出して？あっはっはっは！嘘を付くな。ずっと泣いていたくせに。俺を求めて、毎晩毎晩泣いていたな、夏？】

「ち、が…違…う…！」

【違わない。ずっと聞いてたぞ、夏？たとえこの地を離れようともな。3年ぐらいあれば俺の力も元に戻る。俺は全部知ってるぞ、…お前の気持ちも、

お前の後悔も、お前の…怒りも】

その言葉を聞いた瞬間、夏は体を起こし、ペタンと畳に座り込むと子供の  
ようにワンワンと泣き出した。

「いやあ…やだ…やだあ…！酷い、見ないで…聞かないでえ…！」

夏が浴衣を合わせをぎゅっと掴んで首を振る。

「酷い…酷い…、それやめてって言ったあ…前に、やめてくださいって言っ  
たのに…！」

【どうして？番のことを全て把握しておくのは夫の務めだろお？】

「ひ…あ！」

障子扉がカタカタと揺れ始め、その隙間からずるう♡っと大きな手が伸  
びてくる。

「あ…あ…あ…っ♡」

その隙間から見える、かつて番だった男、右京のゾツとする程の美しい笑みを見て、夏の股間からしよわあ♡と黄金色の液体が漏れ出してしまった。  
「ああ、夏♡漏らしたのか？前はおまんこ、ちよつと舐めるだけで、気持ちよくなりすぎてすーぐおしっこ漏らしてたよなあ♡また舐め舐めして欲しいんだな、夏？」

「い…う…ひう…っ！」

【開けろ、夏。俺を受け入れろ】

「ん、お♡」

ぐわんと脳が揺さぶられた夏がカタカタと震える手でゆっくりと障子扉を開いた。

「ああ…いい子だ、夏」

障子の向こうから伸びてきた血管が浮き出た逞しい腕が、夏の体に絡み

ついた。



ぢゆるるるる♡ぢゅッ♡ぢゅッ♡ぢゅッ♡ぢゅッ♡

「はあ…う♡ん♡う♡い…やあ…♡つ♡もう、いやあ…♡！」

「んッ…♡何が…嫌なんだあ、夏…？」

「きゃんッ♡♡」

大きく開かれた障子の向こうから、煌々と輝く月が照らす部屋の真ん中に敷かれた布団の上。そこに胡坐をかいている右京の膝の上に乗せられた夏は、浴衣をはだけさせられ、その胸にちゅうちゅう♡と吸い付かれていた。夏はぐずるように、自分の腰に回されている右京の腕に爪を立てている。

「やあ…もう、吸ったらいやだあ…ッ♡」

「んう♡んっ♡んっ♡ちゅう♡…ちゅる…♡」

「やあ…!やあなのお…聞いて、聞いてよお…!」

ぐずぐずと鼻を鳴らして子供のように泣く自分の姿が情けなくて、夏は右京の顔を両手で挟み、自分の胸から引きはがそうとする。

「んゝおおッ♡♡!?!?」

するとすでに真っ赤に立ち上がった乳首に、右京の鋭い犬歯がぐに♡と押し込まれる。夏はビクビク♡と体を痙攣させた。

「い…やあ…、それ、やだあ…っ♡」

「いや?また俺に嘘を付くのかあ?」

「あ…ああ…ちが…違います…そんな、そんなつもりっ…ゝおおおッ♡

♡♡」

ぐうう♡と右京の齒が夏の乳首に押し込まれる。夏は引きはがそうとしていたはずの右京の頭を抱え込み、ぷしゃびしゃ♡とまんこから潮を吹き出して絶頂した。

「うあ…うああん、たしゅけて…誰かあ…誰かあ！」

がくがくと喉を晒して痙攣しながら、夏が宙へと手を伸ばす。その手に、一回り大きい右京の手が絡みつき、夏の手の平を自分の頬に当て、スリスリと頬ずりした。

「俺がいるだろう、夏？どうしてほかの奴に助けを求める？お前は俺のものだ。生まれた時から、ずーっーっつと俺のもの。なあ、そうだろお？」

「ああ…あああああゝゝゝ♡♡♡♡♡」

右京のいきり立ったちんぽが、夏のまんこにぶちゅう♡と押し当てられると、そのままゆっくりと膣内を掻きわけて奥へ奥へとねじ込まれる。

「いやあ…いやああ！」

夏はぶんぶんと首を横に振って、必死に右京の手に爪を立てるが、うっとりと自分を眺める右京に少しもダメージを与えられない。

「ああ…だやめ…奥…奥、いやあ…っ♡」

「奥いやあなのかあ…？はは…、っ♡、でもほら、俺のちんぽ、いーっぱい咥え込んで、きゆうきゆう♡って抱き着いてきてるのは、夏のほうだぞ？」

「ああ…ちが…う…違う…してないよお…抱き着いてないい…！」

「んん？抱き着いてのなのか？」

「ってない…抱き着いてないのお！」

そう言いながら、夏は無意識のうちにまんこで3年ぶりのちんぽを締め付けながら、目の前の巨体に縋る様に抱き着いていた。右京はくつくつと嬉しそうに喉を鳴らしながら、はふはふ♡と可愛らしい息を吐く夏の頭を優

しく撫でる。

「そうだなあ…、夏は抱き着いてないんだもんなあ。うん、右京さんが勘違いしてるんだなあ？」

「うん…うん、そう…夏…夏は、嘘付かない…ですう…んうううう♡」

ぱちゅ♡ぱちゅ♡ぱちゅ♡ぱちゅ♡ぱちゅ♡ぱちゅ♡ぱちゅ♡ぱちゅ♡

「あッ♡あッ♡あッ♡あッ♡あッ♡あッ♡」

「うん…夏は嘘付かないよなあ♡やらしくて、きもちいこと、右京さんとする時は、ゼーんぶ正直に話すって約束してるもんなあ？」

「う…うん…あう♡あッ♡しよこ、しよこお♡」

「ん…？しよこがどうしたあ？」

ぱちゅ♡ぱちゅ♡ぱちゅ♡ぱちゅ♡ぱちゅ♡ぱちゅ♡ぱちゅ♡ぱちゅ♡ぱちゅ♡ぱちゅ♡ぱちゅ♡ぱちゅ♡



「んううう♡しよこ、しよこ、きもちいいのお♡右京さあん、ああ、旦那しやまあ♡」

「っう♡はあ…はあ…♡ああ、そうだ♡ちやあんと覚えてんだなあ♡いい子だ、夏♡いい子だから、右京さんがなあんでも言うこと聞いてあげるぞ？…ここ、このデカちゃんぽでめちやくちやに犯してほしいんだな？」

「あ…ああ…」

耳元で囁かれただけで、夏が目を見開き甘イキする。

たちゅんッ♡たちゅんッ♡たちゅんッ♡たちゅんッ♡たちゅんッ♡

「んうう♡ああ、右京しゃん…右京しゃん…ああ、しよこ、奥、奥の…赤ちやんできるとこの、お口、おちんちんでちゅっちゅ♡ってして…くだしやあい♡」

「はあ…♡ここ…か？」

ぼちゅんッッッ♡♡♡♡

右京が熱い吐息を吐き出した後、夏の腰を両手で鷲掴み、自分のちんぽで深く串刺しにする。

「んごおおッ♡♡♡♡」

どちゅッ♡どちゅッ♡どちゅッ♡どちゅッ♡どちゅッ♡どちゅッ♡

「いッ：ああああ♡あああ、しゅご、右京しゃ：ダメダメダメ：うしよ、嘘です：だめ、おねが：奥、激しい：子宮、こわれちゃう♡」

どちゅんッ♡どちゅんッ♡どちゅんッ♡どちゅんッ♡どちゅんッ♡

「ああ♡気持ちいいなあ、夏？お前の子宮のお口が、俺のちんぽにいーっぱいチューしてくれる♡ちんぽの先っぽにチュッ♡チュッ♡って吸い付いてくるから、ああ♡、腰引くの嫌になるぐらいだぞお？」

ぼちゅんッ♡ぼちゅんッ♡ぼちゅんッ♡ぼちゅんッ♡ぼちゅんッ♡

「あッ♡あッ♡あッ♡あッ♡」

「うんうん、きもちーなあ…♡ああ…ずっと遠くから見ているんだけど、ちよおっと心配だから、中、入って確認するぞ？」

「はっ…やっ…やだあ…おねがい、あれ、いやああ…ッ♡」

「ダメだ」

ぶちゅんッッッ♡♡

「ぎッ♡♡♡」

右京のちんぽが子宮口を貫き、ぷにぷにに柔らかくなった子宮の中にめり込む。がくがく♡と震える夏の口の端から涎が首筋を伝い、ぽたぽたと右京の体を濡らした。

ぬこ♡ぬこ♡ぬこ♡ぬこ♡ぬこ♡ぬこ♡ぬこ♡ぬこ♡ぬこ♡ぬこ♡ぬこ♡

「ッ♡ッ♡ッ♡ッ♡ッ♡ッ♡」

「あっはは♡ああ、久しぶりに子宮犯されるの、頭おかしくなるくらい、気持ちいいなあ？ああ、俺の亀頭、ぐちい♡ぐちい♡って締め付けてくれて、夏は本当にいい嫁さんだなあ…♡」

「ぎッ♡  
おッ♡  
おッ♡  
おッ♡  
おッ♡」

「うんうん、ぬこぬこ気持ちいいなあ♡ああ、至近距離で見る夏のアへ顔が一番、やらしー…♡あは♡ああ、もちろん、俺にすっかり開発された体が疼いて毎晩毎晩、いやらしーオホ声出してオナつてたのぢゃあんと知ってるぞ?」

「あ……うそ……うそ……い……やああああ♡」

夏が自分の頭を抱えていやいやと俯く。右京はそんな夏の顔を両手で掴み、無理やり自分と目を合わせさせる。

[illegible]



て、気が狂いそうになるほどのアクメに溺れた。

「っぐうう♡ああ…すっごい…なあ…ああ、夏♡おまんこで、こおんなに気持ち良くなってるのかあ？」

ずちゅ♡ずちゅ♡ずちゅ♡ずちゅ♡ずちゅ♡ずちゅ♡ずちゅ♡ずちゅ♡

「いあああゝゝ♡やだあ、おちんちん、動かしたら、やだあああ！」

夏が半狂乱になって、手足をめちゃくちゃに動かす。

（あだま、おがじぐなるう♡右京さんが感じてる…おちんちんの気持ちよさも…一緒なつて…流れ込んできて…死んじやうう♡）

「いや、ああ♡おちんちん、ぬこぬこやだ♡射精しちゃう♡ううう♡」

夏が歯をカチカチと鳴らし、眼前に飛び散る火花に耐える。右京もまた、感覚共有による夏の快感を同時に感じ、頬を紅に染めながら「っあ♡んう♡」と心底気持ち良さそうな声を出していた。そして逃げ出そうとする夏の体

を羽交い絞めにして、うつそりと笑うとまるで性具を使うかのように、夏の体を激しく上下させ始める。

ばちゅばちゅばちゅばちゅばちゅばちゅばちゅばちゅばちゅばちゅばちゅ

「んや あああああゝゝゝゝ♡♡♡」

「っんう♡う♡ぐうう♡ああ、すっごいなあ…ああ、気持ちいい♡」

ばちゅんッ♡ばちゅんッ♡ばちゅんッ♡ばちゅんッ♡ばちゅんッ♡

「いっ♡… いぐう…♡んううう♡あああ、うきよ、しゃ…っ♡」

夏が奥歯を噛みしめ絶頂する。

「いやあああゝゝ♡だめえ、おちんちんから出ちゃううう♡」

「ああ♡はは…♡ああ、夏が…イキまんこで、俺のちんぽ、ぎゅうぎゅう

って締め付けるからだろお？んう♡あゝ♡きもちいい…んぐうう♡」

ばちゅ♡ばちゅ♡ばちゅ♡ばちゅ♡ばちゅ♡ばちゅ♡ばちゅ♡ばちゅ♡

「おがしぐなるう♡ああ…ああああ！おがしぐなるうのお♡ おおお♡おちんちん、射精しゆるう♡精液、でちゃうう♡」

快感で馬鹿になった夏は、右京のちんぽでの快感を自分のものと認識してしまっていた。そんな夏を見て、右京は愛おしそうに笑うと、すくい上げるようなキスを贈る。

「んうう♡んう♡はあ…うう♡舌…ぬりゅぬりゅしてる…ッ♡♡」

「ん…ふ…あ…♡ああ、脳がビリビリするな？夏…夏のおまんこ、気持ちい…ぐう…♡夏も右京さんと一緒に…射精する…か？いっぱい、ビュービューって精液出す快感、一緒に感じようなあ♡」

「うん…うん…射精しゆるう…右京ちゃんと…一緒におちんちんから、しえーえきだしゅのおお♡」

「うん♡いい子♡じゃあもうちょっと頑張って、おちんちんとおまんこで、



同時にイクイクう♡ってして、おかしくなるぐらい気持ちよくなろうなあ♡」

ぐちゅ～～～～、バチュンツ♡

「おおおおツ♡♡♡♡」

「ぐうう…ツはああ♡」

ばちゅんツ♡ばちゅんツ♡ばちゅんツ♡ばちゅんツ♡ばちゅんツ♡

「んきゅううう～～♡きもちい、きもちい♡おちんちんと、おまんこ、ど

っちもイクツ♡イクイクイクイクツ♡んぐうう～～♡♡」

「っゎああ♡出る♡出す出す♡ほら、夏、おちんぽミルク、出す

ぞお？んぐうう～～♡♡♡」

「っ～～～～♡♡♡♡♡♡」

「ぐうう～～♡」

ぶびゅうううう~~~~、ぶゆうううう~~~~ぶびっ…びゆるるるる♡

「う~~~~♡ う~~~~♡ う~~~~♡♡♡」

夏が涙と鼻水、涎を垂れ流しながら、白目を剥いて2倍アクメを感じてる表情を、同じ快感を受け止める右京が舌をだらしなく外に出しながら至近距離で見つめる。

「ああ…ああ…、3年ぶりの…同時アクメ…うう…ああ、幸せで死んじまいそうだなあ…夏…?」

「うきよ…しゃ…うきよ…しゃ…ん、こわ…こわい…これ、戻ってこれない♡」

「ああああ、可哀想に…♡いきっぱなしになっちゃったのかあ♡いいぞお、今日は…久しぶりに失神するまで、旦那様といーぱいイクイクしようなあ♡」

「うッ……??っあ……おちんちん、コスコスやあ……やあなのお……ッ♡」

夏を布団に押し倒し、正常位で腰を振り始める右京に、夏は口では嫌がりながらも、しっかりと両手を広げて抱っこをせがんでいたのだった。